

奈良県内の第1次産業に関する現地訪問調査

小松原 尚

はじめに

奈良県には特徴のある第一次産業がいくつかある。今回取上げるのは、内水面漁業としての大和郡山の金魚養殖と、ナショナルレベルのブランド力を有する吉野地域の林業である。これらの地域を対象に、第1表に示した日程にて現地訪問調査を実施した。

奈良県立大学における地域志向教育の特徴は、大学教育改革と地域志向教育とを連動させ、そのための科目としてコモンズゼミとフィールドワーク科目を設定し、それらを本学における学修上の必修科目としたことである。

第1表の番号1の活動はコモンズゼミⅠの授業の一環としてゼミ生全員の参加のもとに実施した。一方、同番号2の活動は、フィールドワーク科目への取り組みをも考慮し、学年縦断的な学生のための活動である。また、同時に吉野の木材を利用する住宅メーカーの同業者団体のツアーに参加することにより、学外の学びの場を利活用することにもなるのである。

地域志向教育にあっては、学びの場・学校としての大学における講義とその知識を踏まえた学外における学生の実践行動とが連動することにより、学生にとっての教育的効果が得られることになる。そこで、経済地理学ほか、学生の講義履修を踏まえての上記の地域において、学外実習の展開を試みた。

この学外実習にあっては、単に講義などを通して得た知識を現場で再確認するだけでなく、産業の形成と地域の発展とのかかわりを現地訪問調査に携わりつつ学生自らが認識していくことにその意義がある。学生を調査補助として活用し、学生自らの目線により、対象地での学習活動の環境調査のみな

研究資料

らず集合から目的地まで、その往復途上も含む調査活動である。この調査活動の構成については第2表に示した通りである。

大和郡山においては、学習関連観察のみを実施した（第3表、第4表、第5表）。一方、吉野の林業ツアーにあっては、すべての項目について調査活動を行った（第6表～第17表）。

第1表 現地訪問調査

番号	活動日	調査対象	所在地
1	2015/06/25	やまと錦魚園郡山金魚資料館	大和郡山市
2	2016/02/14	第14回吉野の森ツアー (奈良をつなぐ家づくりの会)	奈良県川上村ほか

第2表 現地訪問調査活動の構成

	項目	観 点
移動中観察	景観資源調査	徒歩移動中や車窓から眺められる景観で、興味のある地点とその内容を幾つでも記す。
	危険発見調査	交通上の危険箇所、道路渋滞など、学習のための移動に際して、注意喚起の必要な場所とその内容を幾つでも記す。
	移動時学習環境調査	学習の場として利用する場合に、①学生が予め準備しておくべきこと、②移動中の装備としてあったらよいと考えられるもの、③移動中に安全にくつろぐための留意点
現地体験観察	現地理解促進度	案内の方からの説明からこの職場や現地に関してどのような興味深い知見が得られたか。
	ホスピタリティー度	店舗の従業員や案内担当の皆さんは、お客様（あなた）に対する接客に習熟していたか。
	商品適合度	現地・現場での食堂で出される食事や店舗で販売の商品は現地の状況に見合ったものだったか。
学習関連観察	勉学関連性	今回の活動で得られた知見は、今までのあなたの勉学とどのように関連するか。
	ひらめきときめき性	今回の活動の体験から、どのような発見があったか。ドキドキするようなことがあったか。
	勉学発展性	今回の活動で得られた知識、経験を今後のあなた自身の勉学にどう活かすか。
対人聴取	現場・現地愛着度	現場や現地での暮らしや仕事への関心、それを続けたい意欲、経済的基盤。
	暮らし働き方私史	自分自身のここでの暮らし方や働きぶりを遡り振り返ってもらおう。
	人的交流度	近所や職場の人たちとのかかわりはどの程度か。

1. やまと錦魚園郡山金魚資料館

第3表 大和郡山市内における学習関連観察(1) 勉学関連性

通番	観 察 内 容
100	金魚の産地から、金魚すくい選手権が開かれるようになった。これと同じような、そばの産地がそば食い競争が開催されているように、地元名産をモチーフとしたイベントの開催が活性化、観光客の集客に繋がればと思う。
101	郡山市内を地域の特性や産業について注目し、散策したことは地域経済や経済地理学で学んだ、「産業の立地」について関連しており、なぜその産業がこの地域に根づいたのか深く考えさせられた。
102	金魚資料館に訪れたのは初めてであったが、大和郡山市が金魚をシンボルに地域をより印象深めるための役割を担っていることが分かった。今まで、地域を復興させるための方法の例をたくさん見てきたが、何か多くの人の興味をひきつけるシンボルを作ることはどの地域にも必要だということが共通に関連していると感じた。
103	大和郡山市は、江戸時代から金魚養殖を継続してきたことで、金魚を市の魅力のひとつとして扱えるようになったといえる。継続できた要因は、大和郡山市の恵まれた自然条件があったからだ。◆そして、市内全体を「金魚」を意識したもので雰囲気作りをしていた。こうすることで、訪れる市外の人々へ市の特色をアピールすることが出来る。大和郡山といえば金魚、という関連付けが強く推されていた。
104	私自身、奈良県出身ということもあり、小学校の頃から郡山という町は「金魚の町」であるという話を嫌というほど授業などを通して聞いてきました。しかし、実際に自分の足で郡山の金魚資料館を訪れるのは今回が初めてでした。金魚資料館や郡山の町を歩いてみると街には金魚をモチーフにした電灯や電話ボックスなどがあり、郡山が金魚の町であると言われるゆえんが分かりました。
105	郡山という奈良のほかの地域と比べると有名な観光スポットや建物がない地域でも金魚に目をつけて、地域に人を呼んで活性化しようとする姿勢とそのPRのしかたは地域振興の典型例だと思った。
106	大和郡山市内では、広報活動が盛んに行われているという点で、マーケティング戦略の中のプロモーションと深く関連していると思われる。具体的に言うならば、大和郡山市の伝統ある金魚産業というものはどのようなものなのかを伝えるために郡山金魚資料館が建てられている。そして、雑誌に取り上げられているという点で、プロモーションと関連していると考えられる。また、金魚を通して市外からでも足を運んでもらって、地域活性化に結びつけているという点では、地域経済と関係していると思われる。
107	金魚資料館への道中には金魚の絵のマンホールや看板などたくさんの金魚をモチーフにしたものがたくさんあった。金魚の名産地として大和郡山を積極的にアピールしており、その土地の名産品アピールの手段として大変興味深かった。

研究資料

108	今回、大和郡山市を訪れて学んだことは「まちおこし」についてである。金魚をPRに用いていたが、その性質などから「水質が綺麗であること」などの広告に用いていた。金魚産業の高いシェア率を打ち出し、観光地を作り上げようとする姿を見た。それらの内容は、地域創造概論での学習に非常に関連していると感じた。
109	私はフィールドワーク科目で商店街の地域調査をしようと思っているので柳町商店街はそこまで衰退していなかったので、調査したら、色々な事を聞けるだろうと思った。
110	地域デザイン論←まちづくりへの工夫など
111	町の主幹産業になっているものは、昔からあった農業や養殖、後から設置された工場などがある。今回は金魚の養殖を見学した。◆元々は明治維新によるリストラされた武士たちを助けるために藩主が考案したという歴史があるが、現在では後継者不足に悩んでいるようである。こうした産業は日本中にたくさんあるため、どのようにしたら産業の維持をスムーズに行っているのかを学ぶ必要がある。
112	奈良県出身で小学校の頃から、奈良県についての授業が組まれていたため、大和郡山市の特産品が金魚ということは存じていたが町あるきをしたのは、初めてだったため、知識と実学がやっと一致した。
113	大和郡山市についての知識が皆無だったので金魚が有名ということを知って、少し驚いた。他の市なども、その土地の主な名産品や有名なものをうりにしている部分があるのではないかと気になった。
114	かつて大和郡山市を旧家の再利用といった視点で現地を視た。今回は金魚という地場産業といった違う視点で町を視ることができたので、多角的な視点で1つの地域を見たということになる。
115	昔から金魚を売買し、経済を動かし、産業を盛んにしていたことから、地域経済の関連科目のほとんどと結びつく。
116	去年、履修していた「地域デザイン論」の課題でフィールドワークがあったのだが、自分が行った場所が大和郡山市（はならあと目的）であった。そこで見て回った作品を今回も発見することができた。（金魚の電話ボックスである。）また、1度大和郡山市の駅周辺を歩き回っているので、今回のフィールドワークは行動しやすかった。
117	“なぜそれがそこにあるのか？”という地理的知識を応用して、大和郡山に金魚の産業が発展した背景をふまえて、フィールドワークに臨むことができた。
118	今までの学習で学んだ地場産業がいろいろあったが郡山ではそれが金魚だということがよくわかった。特に町のいろいろな所で金魚をモチーフにしたものを見つけることができた。このことから、町全体で金魚の町だということ売りだしているということがわかった。
119	金魚と大和郡山の関わりの経緯や、大和郡山市内における金魚に関するものや行事の由来の調査は、歴史と関連する。

120	その地域の特性を生かした街おこし、今回の郡山の場合は金魚をピックアップして観光客を呼びこもうとする施策は、本学での地域創造に関連すると考える。
121	郡山市は、金魚が有名であるが、街の一部ではなく街全体で、地域が丸くなって金魚を押し出すに意味があるのだと感じた。◆地域が協力して活性化に努めている様子がよく分かった。
122	大和郡山市では、市全体で金魚のPR活動をしていて地域の活動という点で地域活性化に関連していると感じた。金魚に関するものがたくさんあり、観光産業が活発に行われていた。また、大和郡山市では金魚すくいの全国大会を催すなど金魚に関することに力を入れており、観光誘客につながっていると感じた。
123	金魚資料館を見学して、金魚は室町時代の中期頃に中国から渡来したということを知った。また大和郡山市における金魚の養殖は、1742年に柳澤吉里侯が甲斐の国から大和郡山へ入部のときに始まったと伝えられているということが分かった。これらのことから、歴史と地域資源を活かした地域産業の関係は、地域活性化の勉強に関連していると思った。
124	金魚は江戸時代初期から養殖が始まり高価なものとして扱われて、後期に庶民へと広まっていった。大和郡山市が有名になったのは将軍が甲府からもってきたためである。それを今でも維持しているのは大変すばらしいことであり、日本文化を残すことの重要性を知った。
125	18世紀に時の藩主柳澤氏の入部と共に広まった金魚産業は江戸時代は藩士の副業として、明治以降は職業として郡山の地に根付いてきた。そうして現在まで地域の伝統産業として、栄えてきた。今では商店街の活性化にひと役買う形で電話ボックスの金魚やとうろうの金魚などを用いて観光客の集客に貢献している。以上のことより観光及び地域産業に関連していると思われる。
126	カフェだけでなく市役所の中にも金魚がいて、町ぐるみで金魚をアピールしていることが分かる。このように行政が加わることで、町おこしが住民と行政が一体となって行えることは、地域の経済的な結束を作れるという点で非常に関連が強い。
127	郡山という街にとっての金魚は、ただ産業の一つではなく、歴史的、文化的なものも絡んでいるものであったが、これは今まで学んできたものも、一つのものごとがあったならば、一つの見方だけでなく、多角的にみることで、新たな発見があるということで、関連している。
128	大和郡山市に定着されているイメージの“金魚”を使い、街のあちらこちらに、それをモチーフにしたデザインを飾るだけでなく、思いもよらないものを水槽として使うことでより市のイメージを華やかなものにしていました。あえて観光客のイメージ通りにすることで集客upを狙うという方法もあるのかと関心しました。

129	<p>以前、コモンズゼミのフィールドワークで訪れた尼崎市の工業地帯の観光地としての活用の例のように、その地域が特化した、またはしていた産業地を、観光地として利用し活性化を測ることの優位性をより深く理解することができた。◆近年、大和郡山市では、他の金魚生産地と比べると生産量は多いが、都市化に伴う水質汚濁などにより以前より生産量は減少した。また、生産量1位の座を愛知県の大府市に奪われてしまった。そこで観光地としての魅力をプラスすることで、地域の衰退化が緩やかになっているように考えられる。◆また地域の歴史と現在の産業との関わりもよく理解することができた。◆金魚資料館にあったさまざまな歴史資料を見て、歴史的に大きな成功を遂げ発展した産業は、数年後、数十年後、そして数百年後、変わらず飛躍しつづけることがわかった。</p>
-----	--

第4表 大和郡山市内における学習関連観察(2) ひらめきときめき性

通番	観 察 内 容
130	<p>金魚すくい選手権のポスターが貼られていたが、この選手権が広く国内に広がり、さらに年齢別等のクラス別、最終的に海外にも広まれば、面白いと思った。</p>
131	<p>座学で得た知識を確認、意識しながら現地を自らの眼や足で経験することはとても大切だと感じた。産業について考えながら市内を散策すると、色々な発見があった。</p>
132	<p>実際に金魚資料館を訪れて、今まで見たことのない金魚の種類を発見したり、金魚の歴史を理解できた。また、実際に大和郡山市のやなぎまち商店街を歩き、町のシンボルである金魚がどれくらいの数でどこにあるかなどを探すことによって、町の方々がこの町を活性化させようと努力していることがみてとれた。◆やなぎまち商店街で金魚の公衆電話や、金魚が描かれたマンホール、金魚休憩所なるものまであり、見つけるのが刺激的でドキドキした。また、町の方が話しかけてくださり、昔はもっと活気づいていてんだなどの商店街の話も聞けて、身近にこの町を感じる事ができた。</p>
133	<p>金魚をモチーフにした設置物は多々あった。しかし、そのなかでもやはり生きた金魚が泳ぐ電話ボックスには驚いた。京都銀行支店の前にも金魚燈籠が設置されていた。箱状のガラスがあれば金魚を入れる徹底ぶりには感心させられた。◆市内のいたるところに宣伝の工夫が施されており、これぐらいの気合がなければ活性化には繋がらないと納得した。◆一方で、資料館の簡素なつくりには呆然とした。資料館と銘打つ必要性は感じられなかった。</p>
134	<p>私たちが今回訪れた郡山の金魚資料館は昭和30年頃から金魚の生産地見学に訪れる奨学生や中学生の遠足や社会教育団体に自営の養殖場を開放しており、30年間の間に延べ10万5000人の見学者が足を運んだという事実を知り大変驚いた。また、郡山が金魚の主要産地となった歴史は古く、下級武士の内職として飼育していた金魚の養殖技術が、徳川の末期から明治時代にかけて付近の農家に伝えられ、水利の便の地の利を得て日本の主要産地となった。</p>
135	<p>金魚資料館だけでなくまち全体で金魚を売りにしていることがまちを回ってよくわかった。テレビにも取り上げられた金魚に関連するものを見ることができたのは興奮した。</p>

136	大和郡山市内を歩いて観察していく中で、金魚産業をより多くの人達に知ってもらうために様々な広報活動を行っていることがよく分かった。例として挙げるならば、金魚の電話ボックスである。その名の通りに電話ボックスの中を金魚が泳いでいるのだ。他では見られないもので、金魚産業をアピールするためにこのようなものが考えられたということが見て取れる。その他には、金魚の絵が描かれているマンホールや街灯である。これは、私達が歩いていて、上や下を見ても金魚の絵が目に入るように、視覚を通して覚えてもらうような工夫がなされていることがよく分かった。また、金魚は昔から縁起の良い生き物として知られているので、これから先には、良いことが待っているであろうというような期待を膨らませることができた。
137	こんなにもたくさんの種類の金魚がいること、また安い金魚から高い金魚まで、中には1匹数万円する金魚がいることに驚いた。
138	大和郡山市の金魚産業を用いての町おこしにて、商店街を中心とした町中いたるところで金魚のロゴを見ることができた。まち（地域）全体で「きんぎょの町」を作ろうという意識の高さを感じた。やはり、市役所や観光案内所など施策だけでなく、地域全体の協力が必要なのだったと思った。また、「金魚ロール」というスイーツを発見した。食べ物という手軽さや、見た目の可愛さなど、人々がより注目しやすい工夫がされていた。関西ローカルの番組で紹介されネット販売を行っているなど、多くの人が手に取りやすいような努力も見つけることができた。金魚資料館では様々な種類の金魚を見ることが出来、金魚に対する関心度を高めることが出来た。また、金魚が出ていた過去の資料なども飾られていてMAPなどもあり、金魚を学びやすくするための工夫がみられた。
139	郡山は金魚の街として知られ、有名になっているが、金魚に関するような店などは少なく、モチーフとして金魚を使い、ブームに乗っかっているのを感じた。金魚博物館は展示だけでなく、販売もやっていたが金魚の環境が良くなかった。
140	地域活性化のために「金魚」というテーマを使い、行政や共同体の人々が様々な手をつくしていた。→特に共同体の人々は町に対する思い入れから電話ボックスに金魚を入れるなど、ザンシンな試みを行っている。
141	大きな山も川もない奈良市周辺で、どのようにしたら水を獲得できるのかという事がわからなかった。今回の活動で1つわかったのが、ため池が多いために水を確保できているからなのではないかという事だった。古墳の周りの掘も利用して水を確保しているという事がわかった。
142	昔から奈良県はPRが下手だと感じ生きてきていたが、金魚の宣伝事業を見るかぎり、魅力を引き出し、町の人の道案内も正確であると感じ、PRが下手というわけでもないと思うことができた。◆しかし、もう少し+aが必要だと感じた。
143	マンホールに金魚の絵が描いてあったり、金魚の電話ボックスがあったり、思った以上に金魚がまちづくりに取り入れられて、良い町だと思った。
144	さすが「金魚の街」と銘打っているだけあって、マンホール、バス停、さらには喫茶店やグッズに至るまで、まるでテーマパークのようであった。街を歩いているだけで楽しい気分になる非常に珍しい街であることがわかった。90分程度では満喫するのに時間が足りなかった。

研究資料

145	あらゆるところに金魚のマークがあり、歴史があり、というのを感じることができくらい、街おこしに力を入れていると感じた。
146	金魚資料館ではたくさんの種類の金魚が保管されていることに驚いた。(夏祭りの屋台で見るぐらいの種類の金魚しか知らなかった。) また、金魚をモチーフにした可愛い作品がたくさんあった。(箱本館「紺屋」にて。)
147	奈良県大和郡山市は元々、溜池が多くあり、溜池には、浮遊生物(ミジンコ)が多くいたことが重なって金魚を活かした産業が発展したことがわかった。 ◆とても身近に溜池があって町全体で産業を盛り上げていた。
148	金魚の資料館の横に養殖場があり、そこに(〇〇様 4500匹)と書かれた名札がついていたので、おそらくこの時期だと夏祭りや夜店の金魚すくいに使われるものだったと思った。
149	大和郡山に町並みには金魚をアピールした看板や建物が多く見られ、地域の人々も大和郡山が金魚のふるさどであることに誇りをもっていることがわかった。
150	金魚には様々な種類があり、一匹数百円~数万円するものもあって驚いた。金魚の養殖が盛んになったのは明治時代で、ガラスの金魚鉢に入れて売り歩いていた。郡山市は金魚の産地として、街中に金魚をあしらったモノがあふれている。特に公衆電話ボックスに金魚を入れる発想は面白いと思った。
151	まず、郡山市の金魚資料館では膨大な数の金魚が飼育されており、出目金ではなく目が袋状に膨らんでいる金魚や、大きい金魚など初めて見る金魚がたくさんあり、驚いた。◆また、街を散策した際、街のいたるところに金魚のモチーフや金魚がデザインされたものが見られたが、中でも金魚の電話ボックスはとても綺麗で素敵なアイデアだなと思った。
152	大和郡山市は金魚のイメージがあり、そのイメージ通りの町づくりをしていると感じた。金魚の看板や街灯、グッズなど金魚の町だと思えるものがたくさんあった。また金魚の電話ボックスや灯籠など生の金魚を見ることもでき観光するのが楽しくなるような工夫がされていた。金魚資料館では、気軽に金魚と町の歴史やたくさんの金魚をみることができ親しみやすさを感じた。
153	大和郡山市を散策していると、側溝で金魚が生息していた。その土地の地域資源である金魚が、町中のポスターやお土産、看板、マンホールなどのキャラクターとして利用されていた。また、電話ボックスや机を金魚鉢のように利用されていた。
154	金魚資料館には数多くの金魚が養殖・飼育されており、金魚に関する展示物の部屋にある展示物は普通では見られないようなものが多くあった。◆しかし、立地的には金魚をモチーフにしたものがたくさんあった大和郡山市の駅より離れたところにありわかりづらいところだった。水のことを考えると仕方がないかもしれないが、せっかくあれだけ多くの近所や展示があるなら、もう少し駅のほうで広告をしたほうがより多くの人に見てもらえると思う。
155	郡山には何度か訪れたことがあったが、金魚に関連するものは目に入らなかったが、ゆっくりと歩いて街を眺めてみると伝統産業を押し出した街作りがなされているということが分かった。電車からの風景では何でもない田舎道であったが近づいてみると全く違う顔をのぞかせたことには感嘆した。一匹せいぜい千円もすればいいところだと思っていたが一万円を超える金魚がいることには驚いた。

156	金魚カフェ柳楽屋では、店内で金魚を飼っている。又、テーブルに水槽をはめ込んで、その中を金魚が泳ぎ、展示の仕方にもこだわっていた。
157	一つの産業が街に根つき、シンボルとして、商業を営むだけでなく、一般住民にも親しまれ、浸透するということがあるのだということが発見できた。
158	電話ボックスが水槽になっていたり、カフェの机の中が水槽であったり、灯籠の中が水槽になっていたり、そんなところまで!と驚きっぱなしでした。キーホルダーやタオルは勿論、バス停の標識やとび出し注意の看板、地元の掲示板のデザインにまで金魚があしらわれ、初めてながらとても和みました。
159	大和郡山市内で見つけた金魚に関連するものなかで特に、イオン大和郡山で見つけた期間限定フォトスポット“金魚ちゃん(夏)”、柳町の“金魚の電話ボックス”、イオン大和郡山近辺の銀河工場で製造されている“金魚ロール”の3つのユーモアがあり、またドキドキワクワクしながら『金魚のまち 大和郡山』を感じることができた。◆イオン大和郡山の期間限定フォトスポット“金魚ちゃん”はイオン大和郡山の人気マスコットキャラクターだ。金魚ちゃんは季節によって装いが変わり、私が訪れた6月後半は金魚ちゃんはヒマワリに囲まれていた。春には金魚ちゃんはピンク色の桜柄に変化し、昨年秋～冬にかけては、その年流行した映画「アナと雪の女王」をイメージして水色の雪柄に変化した。また今回の“金魚ちゃん(夏)”では周りに数匹のカブトムシが隠れており、子供たちが探し物ゲームをしたのしめるようになっていた。◆柳町の“金魚の電話ボックス”は観光客にも地元でも有名な観光スポットである。金魚が電話ボックスの中で泳いでいる姿はとても幻想的だった。◆イオン大和郡山の銀河工場で作られている“金魚ロール”はスポンジが金魚の柄になっていて、金魚の赤をイメージしたイチゴを使ったクリームがたっぷり入っている。味はさる事ながら、デザインも魅力のひとつである。◆銀河工場はネット通販を行い、全国に『金魚のまち 大和郡山』を発信している。

第5表 大和郡山市内における学習関連観察(3) 勉学発展性

通番	観 察 内 容
160	金魚関連の土産店でみた「アイ染」が、地元でかつて生業としていた産業であったので、再び「アイ染」を復興させられないか考えてみたい。
161	講義の中で得た知識をフィールドワークという形で自ら考え行使する経験はとても楽しく新たな発見につながると分かった。
162	今回のフィールドワークで訪れた大和郡山市では、1つのシンボルを掲げることによって町の人々が協力することによって成り立っている。多くの過疎化した地域に関して学ぶ機会が今後あると思うが、何か象徴になるようなものを発見しそれをどのようにして活用していけばいいかということを考える点で、今回の金魚の例を活かしていきたいと考える。
163	身近なものにも可能性を見出す目を養う。コストをかける場所を見極める。

研究資料

164	今回、金魚の町として古くから知られ、地場産業を現代まで守ってきた郡山の町を訪れました。そして実際に自分の足で街を歩くことで、郡山市や郡山の商店街などの人が協力し合い地場産業を継承してきたということがよくわかりました。奈良県には郡山の金魚産業だけでなく多くの地場産業が存在しています。今後、それらの地場産業に何らかの形でかかわっていく際には、今回の郡山へフィールドワークで得られた知識を基に、両者を比較してみ比べてみたいと思います。
165	これといった見所がない地域でも PR や、目のつけかたによっては、大きな見所のある地域には及ばないものの、観光客を呼べるということがわかった。一見すると何もなさそうな地域を振興するモデルを見たと思うのでそれを活かしたい。
166	金魚産業を今後とも継続していくために、協同組合大和郡山金魚研究会を設立して保全していることから、伝統産業を守っていくための方法を考える際に活かしていきたい。また、大和郡山市全体で至る所に金魚をモチーフにしたものをちりばめていることから、広報活動を通じた地域経済活性化を考える時にも活かしていきたい。そして、フィールドワークの計画書で自分が決めた活動目標を達成できるようにしていきたいと考えている。
167	金魚の名産地として大和郡山をアピールしており、ここでとられているアピール方法は金魚に限らず、様々な場所の名産品のアピールに役立てると思う。
168	「まちおこし」の姿勢などを学び、今後の自分の学習に生かしていきたい。今回の大和郡山市でのよかった例と、改善点などを分析したい。
169	フィールドワーク科目の地域調査で奈良市の商店街を中心に比較検討しようと思っているので、郡山のような文化と商店街の関連性も調べようと思う。
170	地域おこしのためには、共同体の人々が自ら行動していくことももちろん、それらを行政がサポートしていくことも重要である。→場所や費用、人員など⇒地域復興について考える際に考慮すべき点として活かす。
171	実地踏査は時間やコストがかかるものだが、実際に行ってみると、上記のため池のようなひらめきもあるため、決して無駄ではない、今後、もっと増やしたいと考えている。
172	本来ならば、城下街とはいえども衰退しきっていたであろう郡山駅前だが、アピールポイントをしっかりとわきまえていると、完全に死んだ商店街にはならないと思えた。◆1つでも“アピールポイント”があると街が死にきるということはないと感じたので、地域活性のフィールドワークをする機会があれば活用できる知識へと昇華させたい。
173	金魚を用いたものがとても多くあったが、自分の地元の町には全然ないなと思った。地元の名産品などをもっと大々的にアピールしてほしいと思う。
174	この歩いているだけで楽しいテーマパークのような街づくりは、他の地場産業を町おこしの1つとして押し出しているような地域にも活かされるべきだと経験した。あちらこちらに地場産業の特徴が目に見えるような街をつくることが肝要であることを学んだ。
175	大和郡山市のような、歴史を用いた街おこしを、今後のボランティアなどで、アイデアとして活かしていきたい。

176	8月下旬に大和郡山市で行われている金魚すくい選手権大会に審判員としてフィールドワーク科目にして参加するのだが、金魚すくいに使われる金魚の種類など、今回のフィールドワークで見た金魚と比べてみても面白いのではないかと思う。
177	地域として、盛んな産業を全体でアピールしている郡山市を見て、地域活性化、アピールの仕方をまちなみを歩いて発見することができた。地理的背景や地域資源を活かした集客において新しい知識を身につけることができた。
178	今年の夏にフィールドワークで地域のイベントについて調査してみようと考えている。もし、そこで金魚すくいなどをやっていればその金魚はどこから仕入れているのかを聞いてみようと思う。
179	今回の活動は、地域の方々に対する聞き取り調査が主であったため、この経験を活かして、今後の地域調査における聞き取りで必要なコミュニケーション能力をより向上していきたい。
180	郡山市は特産品である金魚を上手く利用して街の活性化につなげた良い事例だと思う。本学では過疎で悩まされている地域や観光客誘致に悩みを抱えている地域の問題を見つけ出し、活性化させる方法を共に考えている。なので、郡山市の成功事例を参考にしながら他地域に今回学んだことを活かせるように、もっと詳しく調べたいと思った。
181	街を活性化するにあたって、なにかアピールできるものを見つつけ、それを地域が一丸となってアピールすることによって街が有名になり、観光地にもなるということ学んだ。
182	観光資源を有効に使い、町のPR活動をするということは観光について学ぶ際に活かせると思った。今回の活動は事前に大和郡山市と金魚の関連性などある程度知識を持っていたほうがより深く学ぶことができたと感じ、今後の活動では事前調査を怠らずに挑もうと思った。
183	その土地の地域資源を利用した広報活動を通して、地域活性化を行うことで、さまざまな人にその地域について知ってもらえる。また地域資源を活かした地域産業は、地域経済活性化につながるということが分かった。これらの知識を地域活性化について考える際に、活用していきたい。
184	人が来たいと思うような外観・内装にすることは大切なことである。広告の仕方でも認知度は変わってくる。
185	地域の伝統産業をいかに殺さず活かすかに主眼を置き、金魚を活かした町づくりを行っており、町のいたるところに金魚の養殖の池や金魚をモチーフにした展示物が多く見受けられた。ただ伝統産業守っていくのではなくて、その産業を用いた地域活性化を行うことで発展的持続が可能であるということが分かった。地域活性化を学んでいく上で一つのモデルケースとして今後の活動に活かしていこうと思う。
186	郡山＝金魚というイメージはこのフィールドワークに行くまではなかった。郡山市のみに限らず、全国レベルに知名度を広げる方法をその地域の財政といたった状況に合わせて考えられるようにしたい。

187	一つのものごとがあったならば、そのものごとを一つの面を理解して、満足するのではなく、他の側面を自らで探し、更には、自らで、疑問点を持ち、それについて調べるということを行う。
188	予想外なことをするだけではなく、既存のものをそこに組み込むことで、その元からのイメージが強まるだけでなく、より華やかになるということを知りました。これは将来就活などで自分をアピールする時だけでなく、さらにその先、発表等の機会に活かしていきたいです。
189	金魚に関連した新しいユーモアのある観光スポットの増設、金魚すくい大会を開催、お土産の金魚グッズを作るなどして観光地としての魅力を増幅させる方法がたくさんあることを学ぶことができた。◆また観光スポットを構築する際、歴史的産業が新たな念頭に置くべきであることがわかった。この知識を、ゼミなどで地域の歴史的産業と観光を関連付けた地域の活性化を考えるとときに活かしたい。

2. 第14回吉野の森ツアー（奈良をつなぐ家づくりの会）

第6表 吉野林業と関連産業ツアーにおける移動中観察（1）景観資源調査

通番	観 察 内 容
190	当日は天気が悪く、前日から雨も降っていたため、普通なら川の水は濁って汚い色になっているはずだが、川上村の川は全く濁っておらず、透き通っていた。ダムの水も綺麗であった。樹を運ぶトラックとよくすれ違った。ダムといったら今までせき止めている壁の部分しか思いつかなかったが、大滝ダムは水の貯まっている様子も山道からしっかり見ることが出来た。とても大きなダムだった。
191	桜井駅から川上村へは、お店や住宅が立ち並ぶ風景から徐々に住宅が点在するようになり、また、川を横目に坂道を上っていくのが感じられたので、山に向かっているのだなと思った。◆川上村では木工所や製材所の看板が目についた。
192	桜井駅付近は木材店がたくさんあった。また工具などを多く取り扱っている大型のホームセンターもたくさんあった。◆桜井市駅付近のヤマダ電機には「ヤマダウッドハウス」というものがあり、地元、吉野の木材を利用したモデルハウスが展示されていた。◆桜井市から吉野郡へは道が細く曲りくねった山道が続いた。（国道169号線？）◆桜井市内、吉野郡内ともに重機がたくさん見られた。◆日本の造林王と称される土倉庄三郎は、天保11年川上村大滝に生まれた。吉野林業に大きな功績を遺した彼を称えるため、川上村大滝の鎧掛岩に「土倉翁造林頌徳記念」の文字が刻印された碑が建立されていた。◆川上村は吉野川（紀ノ川）の源流が流れていた。昔はこの川を利用して木材を和歌山まで運搬し、和歌山から瀬戸内海を利用して大阪へ木材を運んでいた。◆川上村には田んぼがなく、95%が森林であり、その他5%はダム、川、家、畑である。◆川上村には「大迫ダム」と「大滝ダム」といった大きなダムが2つもあった。ダム釣り場もあった。◆宇陀市には介護施設や病院が多く建ち並んでおり、高齢化の実態が顕著に見うけられた。

193	吉野の森林が広がる場所に入ると、四方八方に真っすぐ、そして見えないほど高く杉の木が広がっているのが印象的であった。またそこへ入る前と比べ霧がとても濃く、森林の中の雰囲気を感じた。
194	桜井市にある旭製粉(株)のタンク。県内で初めて製粉業の会社を見たので、印象に残った。◆棚田◆山が近く、森の中を走り抜ける感じがした。霧が立ち込めているのが印象的だった。◆吉野町河原屋西の付近には割り箸屋があり、吉野らしさを感じた。食品を購入できそうな店舗は、デイリーヤマザキしか見当たらなかった。◆川上村に入ると「森と水の源流館」の案内板があった。ホームページを見てみると、展示コーナーがユニークで、楽しんで学べそうであった。◆トンネルが多い。山が多いことを反映している。◆JAならけん川上支店の玄関には、木で作られたオブジェの様なものがあった。林業が盛んな川上村らしいと感じた。◆道の駅、交番、南都銀行、商工会議所、役場、日帰り温泉施設が一箇所に集まっていた。◆丹生川神社は龍神の総本山であり、天皇陛下も訪れたそう。◆東吉野中学校付近。お昼になっても山に霧が立ち込めているのが印象的だった。カヌーで川下りをしている人がいた。◆大宇陀。ほとんど人の気配がなく、さびしい雰囲気だった。道の駅周辺は車の通りも多かった。

第7表 吉野林業と関連産業ツアーにおける移動中観察(2) 危険発見調査

通番	観 察 内 容
195	途中で山の中に降りて実際に木に触れられる時があったが、柵が何も無いところが多かったため、少しでもふらついたら崖から落ちてしまいそうであった。また、バスの外に出て話を聞いているときに雨が激しく降ってくるのがよくあったため、傘はいつでも持ち出しおくべきである。小さなバスでの移動であったため、揺れにも注意が必要だ。
196	山道は他の道路と比べて幅員が狭いので、大型のバスでの走行は避けた方がよい。
197	高原の森は足場が悪いため、転倒に気をつけなければならない。
198	奈良盆地への入り口である桜井から山に入る道では、山に続いていくことから車道がとても狭く、しかしながらその割には車どおりが多いため危険である。また雨が降っていたためその周辺の川が大変増水しており、近くを散策するときは気をつけなければならない。
199	道路渋滞はなかった。◆森の中にバスが入っていくことになるので、くねくねとした上り坂が続く。◆森の中は道のすぐ下が斜面なので、注意が必要である。当日は雨が降っており、特に足元に注意が必要であった。吉野杉を間近で見ると、触れることがこのツアーの醍醐味でもあるが、足元を滑らせそうで近づくのに抵抗があった。

第8表 吉野林業と関連産業ツアーにおける移動中観察（3）移動時学習環境調査

通番	観 察 内 容
200	<p>①小型バスでの長時間の移動になるため、酔ってしまった時のための対策は何かしらしておくべきである。しかし、酔わないように泉谷さんがゲームやお話してくれたので私はあまり酔わずに済んだ。スマホの充電器は必須である。自然の中を歩くため長靴で行くと良かった。また画質の良いデジカメ等も用意できると良かったと思う。②雨が降っていたため、参加者の傘をまとめておいておける場所がバス入り口付近であれば、車内がぬれてしまわずに済んだのではないかとと思われる。コンセントが一席に一つあれば助かった。小さなバスだったため、荷物を座席の上に置けないのだと思っていたが実際は置けたようなので、そのアナウンス。③ほどよいクライニング。水分補給を怠らないこと。荷物は頭上の収納スペースへ入れるべき。乗り物酔い対策は必須。</p>
201	<p>①川上村の辺りは山道が続くので、乗り物酔いしやすい人は酔い止めを服用しておく。②当日は雨が降っており車内がぬれていたため、乗車口のところにタオルを敷いて足元の水分を拭うようにすれば車内がびしょびしょになるのを避けられる。③移動は山道もあり、バスでの移動時間も長いので、前日は休息を十分に取っておく。</p>
202	<p>①起伏が激しい山道を走るため、車酔いする学生は必ず酔い止めを飲むべきである。◆スギ・ヒノキが多い茂る森に入るため、花粉症などのアレルギーがある学生はマスクをするなどの対策が必要である。◆森を歩いて散歩をするため、前日はよく寝て、体力を温存しておくべきである。②鞆や上着をかけるフックがあればよい。③安全のためシートベルトは必ず着用すべきである。</p>
203	<p>①山道では高低差が激しく、さらに道がくねくねと曲がっており、酔いやすい人だけでなく酔い止めなどの準備が必要である。②車が揺れるためノートにメモすることがあまりできなかったため、携帯電話のメモ機能などを使用すると便利だと感じた。③シートベルトは必ず絞め、メモを取ることに集中せず周りを見ることが必要である。</p>
204	<p>①酔い止め。副作用で眠気におそわれたり、のどが渴く場合があるので、アメやグミを持って行った方がよい。鼻炎薬と酔い止めは併用できないので、花粉症の人は注意が必要。◆折り畳み傘を持参する場合は、ビニール袋も持参すると良い。②特になし。快適に過ごすことができた。③着膨れしない防寒着の方が座りやすく、リラックスできる。◆適度に休憩をとるようにする。</p>

第9表 吉野林業と関連産業ツアーにおける現地体験観察(1) 現地理解促進度

通番	観 察 内 容
205	菟田野の小学校は少なくなってきたが、レストランなど様々な施設として校舎が再利用されている。久保本家酒造の地酒は JAL のファーストクラスにも採用されている。川上村の職人は日本で一番古い。約 500 年前から植林は続けられている。伐採された木を大阪や和歌山に運ぶために、いかだを作って川や海に流して運んでいた。川上村は面積の 95% が森、その次に川やダムがくる。田んぼはない。山の保水力がすごいのは間伐が行われているから。
206	平成 18 年 3 月に廃校になった小学校の跡地を利用してつくられたのが、奈良カエデの郷「ひらら」である。ここには約 1200 種、約 3000 本のカエデが植栽されており、春から初夏にかけて色鮮やかなカエデが咲く。名前の「ひらら」は一般公募によって選ばれ、もみじのような赤ちゃんの手のひらと、葉が風にひらひら舞う様子から名付けられた。かつてはこの校舎で NHK 連続テレビ小説「あすか」のロケも行われた。
207	日本の造林王と称される土倉庄三郎は、天保 11 年川上村大滝に生まれた。吉野林業に大きな功績を遺した彼を称えるため、川上村大滝の鎧掛岩に「土倉翁造林頌徳記念」の文字が刻印された碑が建立されていた。◆川上村は吉野川(紀ノ川)の源流が流れていた。昔はこの川を利用して木材を和歌山まで運搬し、和歌山から瀬戸内海を利用して大阪へ木材を運んでいた。◆川上村には田んぼがなく、95% が森林であり、その他 5% はダム、川、家、畑である。◆奈良盆地は県内 20% の面積しかないのに対して、県内 80% の人口集中している。◆吉野の森林の 66% は人工林であり、残り 34% は自然林である。自然林の多くは人が植林できない崖地などに生えている。◆吉野の森には 1ha に 10,000 本の木が生えている。これは 1m おきに木が生えているということである。全国平均が 1ha に 2,000 本、多くて 5,000 本なので、約 2~5 倍の規模である。◆吉野林業の方々は「上方伐倒」という伐倒を行っている。「上方伐倒」とは、斜面の上方に向かって木を倒す伐倒方法である。運搬には時間と労力がかかるが、斜面上方に木を倒すため、木が傷つきにくく、品質の良い木材ができるという利点がある。◆スギはヒノキと異なり、水を好み、根を深く張る。吉野の森は吉野川の源流であり、水に恵まれた森であるため、スギは成長しやすい環境である。
208	吉野の森林は 500 年前から植林が行われており、日本の林業としては最古の地である。さらに吉野の植林作業は他の地と比べてごく狭い感覚で行うため、木の生長スピードも遅く、木は細くなっている。そのため吉野に今育っている森林は何十年、何百年前かに植林され、そしてそれを現在までの人々が育ててきたのだ。森林という言葉から自然に生えている木々を想像しがちであるが、吉野の森林のように長い期間において手間を費やし植林されてきた森林はかなり貴重であるということを実際に感じ取ることが出来た。

209	<p>日本は国土面積の67%以上が森林である。川上村は97%を森林が占めており、水田は全くない。◆日常的に森から供給される水を飲める国は世界で11カ国しかない。◆吉野川を利用して木材を搬出していた。その担い手の筏師はあこがれの職業だった。死と隣り合わせの危険な仕事でもある。◆倉庄三郎の銅像があった。土倉は林業家であり、台湾にも植林の指導をしている。県内初の小学校をつくった人物でもある。◆吉野林業の特徴は、密植である。約100メートル間隔で植林するため、年輪の間隔も狭くなる。節をなくすため、ヒノキは人為的に枝を若いうちに切り落とす。一方、スギは勝手に枝落ちする。そのため、「死に節」が増える。節がある木材は安く取り引きされる。◆村民より、鹿の方が多い。鹿は木の苗を食べてしまう。自然災害以上に獣害が深刻だという。◆磨き丸太の乾燥は、人工乾燥よりも天然乾燥の方がメリットが多い。</p>
-----	--

第10表 吉野林業と関連産業ツアーにおける現地体験観察(2) ホスピタリティ度

通番	観 察 内 容
210	<p>バスの乗客が酔ってしまわぬようゲームをするなど気を遣っていた。初めて出会った客同士が緊張せず一日を共に過ごせるよう、和やかな雰囲気を作っていた。山の中で柵がない等少し危険な場所での配慮は足りていなかったと感じた。バスの外に出て話を聞いているときに雨が激しく降ってくるのがよくあったが、傘を持っていない人がびしょびしょに濡れてしまっていたのに何の声掛けもなく話を全く中断しなかったため、その点も配慮に欠けていると感じた。</p>
211	<p>どういったコンセプトで運営しているのか、この施設の歴史などに関して昼食前に話があった。◆接客には慣れている印象だった。</p>
212	<p>ツアーのガイドをしていただいた泉谷さんのお話は非常に分かりやすく丁寧であり、吉野林業や木についての理解を深めることができた。またクイズやゲームなど遊びを加えて説明してくださったので、楽しく学習することができた。</p>
213	<p>ツアーにおいて三、四か所ほど周ったが、案内の泉谷さんはそのどの場所でも熱心に話をしてくださった。とくに森林の中、案内の方の作業場では、身近の杉の木や檜に関する知識はかなり豊富で、参加者からの質問疑問にはすぐに答えを聞くことが出来た。しかしながらバスの中においてもそれはあり、帰りのバスの中では、フリップを持って最後まで説明をしてくださり、さらにツアーを通して、案内の方の知り合いや同じ作業をしている方が来てくださったことで、いろいろな体験を知ることが出来た。</p>
214	<p>主催者の泉谷さんは、14回目のツアーということもあり、接客に習熟していた。バスガイドをしつつ、簡単なゲームをしたり、川上村を紹介するビデオを流すなど、参加者を飽きさせない工夫をしていた。山守の方、銘木製造業に携わる方のお話も伺うことができた。専門的な内容に踏み込むことも多く、話についていけない場面もあった。◆集合場所が分かりづらかった。◆当日の行程を事前に伝えて欲しかった。</p>

第11表 吉野林業と関連産業ツアーにおける現地体験観察(3) 商品適合度

通番	観 察 内 容
215	森での時間が少し長引いてしまい昼食が遅くなったのだが、バスで昼食の場所まで行く間になかなか手に入れることができないというお餅を車内で一人ひとつ配布してくれたため、雰囲気も良いままだった。また、昼食の奈良カエデの郷ひららでの昼食も非常に豪華な弁当であった。その弁当自体が本来ひららでは1500円で提供されているものだったのだが、ツアーの1500円の参加費を払うだけで弁当まで食べることができ、感激した。ひららでお土産を買うこともでき、途中で二つほど寄った道の駅でもお土産を買うことが出来るようになっていた。また久保本家酒造でもたっぷり試飲できひ地酒のお土産を買う人も多かった。食べ物やお土産購入の面でも充実したツアーであった。
216	毎月第1日曜日は給食メニューが味わえる。校舎も味がある、昔懐かしい木造の校舎なので、給食メニューはそれと相まっていいと思われる。◆お土産類は、木製の食器やペン立てなどが販売されていた。他にはキーホルダーなどの小物類や、なぜかタイゆかりの小物などが販売されており、こちらは関係性が謎であった。
217	桜井市や吉野郡の木材店では、吉野の森の木の特徴をフルに利用し、建築材からバイオエネルギーまで様々な用途で使われていた。◆宇陀市菟田野の「カエデの郷」では、カナダ産のメイプルシロップやハンドメイドの小物など、現地とはあまり関わりのないものばかりが販売されていて残念だった。
218	食事はとても美味しかったが吉野の森林やその周辺地域のものとはあまり結びつけることが出来なかった。食事や休憩は、以前使われていた廃校舎を利用した場所で取らせていただいたが、とてもしっかりした校舎で、ここで様々なイベントなども出来そうだと感じた。そこではカエデをメインとして栽培しており、多くのカエデが植えられていたが、お土産のコーナーではあまりカエデを扱っていなかった。しかしながら吉野の木材を使ったものは販売されており、特色を感じる事が出来た。
219	川上村の道の駅は、吉野葛を使った商品や桜をイメージしたお土産が豊富だった。こんにやくと柚みそ、手作りまんじゅうが人気だそう。◆奈良カエデの郷「ひらら」でお弁当をいただいた。今回のツアーは観光の要素もあるので、彩り豊かな食事は現地の状況に見合ったものだったと思う。お土産販売コーナーは、観光客のニーズに合っていないと感じた。◆大宇陀の道の駅では、地元でとれた野菜が販売されており、16時過ぎということもあってほぼ売り切れていた。宇陀の銘菓という「きみごろも」が販売されていた。もっと積極的にPRしても良いと思った。「ここでしか買えない」商品は少なく感じた。その意味で現地の状況に見合っていないと考える。

第12表 吉野林業と関連産業ツアーにおける学習関連観察(1) 勉学関連性

通番	観 察 内 容
220	林業という古くから伝わる伝統業を多くの人に知ってもらえるようなツアーを企画し、観光資源として活用している様子は、産業観光にもつながるものであると感じた。また実際にツアーに参加している客層も知ることが出来た。客は泉谷さんの木材商店の同業者や身内感のある人が多く、何の関係もない人で参加しているのは私たちともう一人近畿大学の学生くらいであった。このような点も、産業観光を考える一つの要素になりそうである。
221	吉野の森は苗を密に植林する密植を行っている。具体的には1ha当たり8000～10000本であり、これは他の地域の3～5倍の本数である。密植をすることで木は光を求めて上へ上へとまっすぐに成長する。その後、間伐を繰り返すことによって年輪幅が密で均一な強い木材をつくることができる。これらの木材は建築用材などに使われ、豊臣秀吉の大坂城にも使われたそうだ。当時は和歌山までは吉野川(紀の川)の水運を利用して、和歌山から大阪までは大阪湾を利用して船で運んだという。生産と消費の関係性や原料立地など「経済地理学」との関連もうかがえた。◆現在、奈良県内の林業においては鹿による被害が問題となっている。鹿による被害は農業でも報告されているが林業でも同様で、新たに植林したとしても鹿がその苗を食べてしまうという。林業の場合は山の斜面のため鹿除けに柵などで囲ったとしても山の上の方から飛び越えてくるといふ。これは「やまとまほろば学」や「中山間地域振興論」の講義内容とも通じる部分があった。
222	経済地理学及び地域構造論では日本の気候の特徴について学んだ。日本の国産木材は、高湿多湿・寒暖差の激しい四季の移り変わりの中で成長してきたため、耐水性があり、湿気にも強いなど日本の気候風土に適した材質となっている。
223	今回のツアーで吉野の森林は今大変な危機をむかえている。植林感覚を密集させることで真っすぐ長く成長させる吉野特有の植林作業であるが、そのため森林の管理維持もまた大変である。きれいな木にするため枝は切り落とし、さらに森の環境を管理するため間引きは必須である。このような自然林では考えられない大変な作業、さらに代々にわたりなされる作業にもかかわらず、木の需要は安価なものへと変化してきた。そして経済的に一気に伐採して植林することが難しくもなってきた。吉野の森林はその手間暇から高級品である。しかしながら今まで行ってきた植林作業ですら困難になりつつある。吉野が林業で活性化をするためには、森林をどのように活かすか、木をどのように利用していくか考えることで、林業を今後につなげるのが重要である。
224	国内需要のほとんどを自国の森林資源でまかなえるのに、日本は海外からの木材輸入に依存している。この問題は人文地理学と関連している。日本が外材に依存するようになったきっかけは、高度経済成長期の「住宅建築ブーム」である。「第二次世界大戦中から大戦後にかけて、大量に復興材が伐採された」ため、当時の国内重要に対応できなかったのである(犬井, 2008, p.80-81)。◆鹿による被害は「やまとまほろば学」とも関連している。鹿は木の苗だけでなく、樹皮も食べる。樹皮を剥がされた木は枯れてしまう。鹿から森を守るため、今後人間がどのように鹿と付き合っていくのが問題となっている(奈良教育大学 松井淳)。◆中山間地域振興論でも、間伐がされていない森が全国的に増加している問題を取り上げていた。

※ 犬井正(2008): 農林水産物を外国に依存する日本(所収 高橋伸夫・谷内達・阿部和俊・佐藤哲夫・杉谷隆編『改訂新版ジオグラフィー入門』古今書院: 80-83)

第13表 吉野林業と関連産業ツアーにおける学習関連観察(2) ひらめきときめき性

通番	観 察 内 容
225	森の中でめったに行われることはないという皆伐がされている場所を発見し、その光景に驚いた。新鮮なうちに木の皮だけ剥がされたまっすぐで長い木がたくさん横たわっていた。その状態で自然乾燥をするそうだ。また、森庄銘木産業株式会社では木の皮を水の水で剥がしていた。そして乾燥させる過程で木が割れてしまわぬように、チェーンソーでまっすぐ切込みを入れる様子を見学できたが、下書きもない状態で見事に長い木に一本の切込みを入れた職人芸には感動した。ヒノキの香りも素晴らしかった。
226	木の年輪には夏目と冬目がある。夏目は木の成長が活発な春から夏にかけて成長した柔らかい部分で薄い色をしており、冬目は夏から秋にかけてゆっくり成長した堅い部分で濃い色をしている。冬は成長が止まる。日本には四季があるためきれいに年輪が形成される。木に年輪があるのは当たり前だと思っていたが、国によっては年輪のない木も存在する。
227	年輪は四季がある国の木だけに存在する。年輪には「冬目（濃い部分）」と「夏目（明るい部分）」がある。また年輪は外側に向かって増える。◆針葉樹は広葉樹と異なり、上（縦）に成長する性質があるため、密植が向いている。◆現在、国内木材の受給率は25%であり、数年前の18%に比べると数字は伸びている。しかし、ほとんどがバイオエネルギーとして使われており、建築材としての利用はまだ少ない。◆「節のない木（＝表面に枝のあとがない木）」が高級木材として取り扱われている。スギは日が当たらない枝は枯れて、重さで枝が落ちるが、ヒノキは日が枝全体に当たるように成長するため、「枝打ち」といった枝を切り落とす作業を行う必要がある。
228	吉野で育った木はその手入れの大変さから分かるように、強度があり節が少なく、さらに真っすぐであるため使用の用途はさまざまである。今回ツアーでは、吉野の木を使った家づくりについても説明をいただいた。その中でも印象に残ったのは、家の中に大黒柱として吉野の木を利用するものである。家の購入者は家族みんなでまだ加工されていない木を見て回り、どれを自分の家の柱にするのか自分たちで決めるのだそうだ。そして家に住んでいる間、自分たちで選んだ柱ということで愛着を持つそうである。この取り組みは吉野の木をアピールする点で非常に良い方法だと感じたり、また大黒柱に出来るほどの吉野の木の特徴を簡潔に伝えるとても良いものだったと思った。
229	四季のない地域では、木に年輪がない。私たちが年輪として数える線は、「冬目」と呼ばれ、秋～冬にかけて成長した部分である。冬目が多いほど密度が高く、高強度になる。春～夏にかけて成長する部分は「夏目」と呼ばれる。◆杉皮も取り引きされる。◆人工林は「50年から100年で育つ大根の畑のようなもの」という説明が新鮮だった。◆「背割り」をつくることを初めて知った。木材は伸縮性があり、乾燥するとひび割れてしまう。それを防ぐため、あらかじめ木材の中心に向かって切り込みを入れておく。背割りをしても、強度はほとんど落ちない。◆水圧で樹皮を削る機械を見学した。刃物で削っていると聞いていたので驚いた。水圧は指が吹き飛んでしまうほどだという。

第14表 吉野林業と関連産業ツアーにおける学習関連観察(3) 勉学発展性

通番	観 察 内 容
230	公務員講座を受けているが最近自分が公務員になりたいのか分からなくなっているという話を私が昼食時に泉谷さんにしたところ、泉谷さんの周りの公務員たちは楽しそうでやりがいを持って仕事に取り組んでいるよ、という言葉をいただいた。また、川上村の公務員になって是非村の活性化も手伝ってほしいとも言っていた。やはり、若者が減ってきている地域は外部からやってきた若い人への期待も強いのだと感じた。今後は今までと少し違う視点でツアーの意味や価値について考えることができそうである。
231	人工林は50～100年で育ついわば大根畑のようなものであり、木を伐ることは収穫することだという。人工林の年間成長量は6000万m ³ であり、これは日本の年間木材消費量の80%にあたる。国内の木材消費量は国産材の毎年の成長量でまかなうことができるが、安い海外の木材に頼っているのが実情だ。それによって国産材の価格が低迷し、林業従事者の減少あるいは高齢化の結果、手入れ不足の山が続出する事態となっている。現在、鹿などの動物の被害も問題となっている。◆林業が衰退してきた背景には、われわれ消費者の影響も含まれている。デザインを重視することは悪くはないがそういったデザイン性の高い海外の家具などを選択することは結果として、国内林業を苦しめることにつながったのだと考えさせられた。
232	吉野林業の方々は森の保全のため無償で伐倒や道づくりを行っている。地域のために、企業が無償で行っている活動に興味が湧いた。またその活動費はどのように工面しているのか、今後の活動の見通しについても知りたい。
233	現在林業の衰退が言われており、吉野もまたそうである。安価な木材の輸入に頼ることで、吉野の林業は経済的に伐採することも出来ず、管理が行き届かない森林が増えてきた。このような現状は林業だけでなく、日本の農家や伝統産業などのさまざまな現場でおこっている問題である。しかしながら今回のツアーで聞いた吉野の木を大黒柱にするなどの活動は、吉野の林業というブランドを活かしており、ただ高級であるだけでなく、高級であるからこそその価値が認められたものだと考えた。今国内ではただ安価なものを使用するだけでなく、高くても良いものという需要も以前より高まっていると感じる。このような機にどのようにすれば国産のブランドを活かせるか、林業だけでなく他の現場でも同様に考えるきっかけになった。
234	今回のツアーで、桜井市、川上村、宇陀市(菟田野、大宇陀)、以上の3地域を1日で訪れることができた。奈良県民でありながら、北東部と南部を訪れる機会は少ないので、有意義な経験ができた。◆地域の課題に取り組むためには、座学だけでなく、現場を実際に自分の目で見て体感することが大切である。今回の活動で得られた知識と経験は、様々な角度から奈良県という地域を捉えることに役立つ。この知識と経験を生かして、説得力のある論文を書くのにつなげていきたい。

第15表 吉野林業と関連産業ツアーにおける対人聴取（1）現場・現地愛着度

通番	観 察 内 容
235	「地域の環境保全のためには無償で保全活動を行うのは仕方のないことなのかもしれない。しかし、現地の林業の人々が生活していくためには、お金になる仕事も増やしていかなければならない。」と仰っており、地域愛着度の高い方であった。（答えてくださった方の職業：山守）
236	扱う木材は奈良県産。◆木材の水分含有量は絶対に15%以下にするというこだわりがある。◆家の床に使う木材は、シロアリに食べられないように赤身を使用する。（奈良をつなぐ家づくりの会幹事、泉谷木材商店代表：泉谷繁樹）

第16表 吉野林業と関連産業ツアーにおける対人聴取（2）暮らし働き方私史

通番	観 察 内 容
237	親子何世代にも渡って、吉野林業を支えてきた。◆山と共に生きている意識を持って日々暮らしている。◆親の仕事のやり方を受け継ぎ、現在は山の様子を見ながら、親から受け継いだものに自分のやり方を加え、山を手入れしている。（答えてくださった方の職業：山守）
238	木材の加工まで担っている。◆昨年、近鉄電車奈良線の車両に「奈良をつなぐ木の家」の中吊り広告を出していた。広告の作成には泉谷さんも関わっており、広告の写真にも登場している。◆節も乾燥すると割れてしまうので、バテ加工している。◆角材をひび割れさせない「対面スリッド」という方法を奈良県と一緒に考案した。（奈良をつなぐ家づくりの会幹事、泉谷木材商店代表：泉谷繁樹）

第17表 吉野林業と関連産業ツアーにおける対人聴取（3）人的交流度

通番	観 察 内 容
239	他の山守の方々と一緒に作業を行い、山主の方々や木材店の方々とも交流があり、交流の幅は広い。（答えてくださった方の職業：山守）
240	節がある木材は避けられる傾向がある。そのため、木が若いうちから枝を切ったり、密植をして節ができないようにしている。一方で、節がたくさんある木材を使いたい顧客もいるという。このような顧客ニーズを同業者にも伝え、情報交換をしている。コミュニケーションは活発に行われている。（奈良をつなぐ家づくりの会幹事、泉谷木材商店代表：泉谷繁樹）

研究資料

付 記

本稿作成にあたり、本学講師斎藤宗之先生の協力を得た。また、地域経済コモンズ所属の学生諸君からも資料素材の提供を得た。そして、調査活動補助者として、伊島萌乃、角田侑未、谷口奈々美、林夏美の皆さんに活動していただいた。

尚、本稿は、文部科学省大学改革推進等補助金(地(知)の拠点整備事業)「地学連携と学習コモンズシステムによる地域人材の育成と地域再生」に基づき、地域志向教育研究経費助成を得た、地・学相互貢献による「奈良県立大学型地域志向教育」確立のための調査・研究の成果の一部である。